



CIF JAPAN

NEWSLETTER No. 53

・<https://cif-japan.com/>
・cifjapan08@gmail.com

Council of International Fellowship Japan

発行人：NPO 法人 CIF ジャパン 理事長 坂岡隆司
編集人：加納光子 発行日 2024 年 10 月 1 日
事務局：〒607-8216

京都市山科区勤修寺東出町 75 からしだね館

Tel. 075-574-2800

Fax. 075-574-0025

目次	巻頭言	三宅 浩	1 頁
	CIF INTERNATIONAL の動き	事務局	2 頁
	研修報告	藤原望美	2 頁
	エピソードから見る人間のやさしさ	ナンディ藤本幸子	5 頁
	CIF 参加からの ソーシャルワーク	フォーク阿部まり子	5 頁
	平和を語り続けましょう	小山哲夫	6 頁
	総会報告	事務局	7 頁

巻 頭 言

「サステナビリティ」

三宅 浩 (2004 年 カラマズー)

この原稿を書いている外では、台風 10 号の影響で私が住んでいる三重県津市には大雨警報が発令されている。津市のこの 24 時間の雨量は観測史上最多とも報じられていた。これも昨今取りざたされている地球環境の変化の影響だろうか。

サステナビリティとは、自然環境や社会活動がその機能を失わずに長期にわたって持続していける可能性を意味している。地球温暖化、大規模な自然災害などなど、まさしく自然環境でのサステナビリティを真剣かつ深刻に考える必要があるのではないだろうか。

一方、福祉施設の現場では何が起きているか。私の周辺の福祉関係者から「職員の高齢化」と言う言葉がよく飛び出します。高齢者の介護施設では、利用者より職員の方が年上、といったことも珍しくないようです。このまま若い人が来てくれなかったら事業を継続していくことが困難になってくることは明らかです。私の法人でも 20 歳代から 60 歳代まで幅広い年齢層の職員が働いてくれています。最近では 20 歳代、30 歳代の方の就職希望者がほとんどありません。地域性的の問題もあるかもしれませんが、これは深刻な問題です。

私も 65 歳を迎え、リタイアの時期を考える年齢になってきました。40 歳代で次の法人経営を任せる人材は確

保していますが、その次となるととても不安です。法人がこの先何年も継続していくためには、次のその次の世代を今から確保し、育成していくことが急務と痛感しています。

最近人材紹介会社から次のような営業の電話がありました。「経験も資格もあって、次の法人理事長を任せられる人材を紹介することができます。もし後継者にお悩みなら相談してください。」と。

どうすれば若い人たちが福祉の仕事に興味を持ってもらえるのか。魅力的な仕事として捉えてもらえるのか。就職してくれた人が意欲とやりがいを持って働き続けてもらうことができるのか。そのために、給与規程を見直したり、国家資格取得のための教育費用を法人で負担したり、退職金の上乗せ制度を作ったり、海外研修制度を作ったり、出来ることはいろいろやっているつもりです。しかし、働き方が多様になってきている現代においては、皆が満足する仕組みは難しいのだと思います。この取り組みにはゴールはなく、やり続けるしかないのだと覚悟を決めています。

経営コンサルタント会社で働く知人からこんなことを言われたことがあります。「福祉関係者はアウトプットが下手だ。民間企業はいかに自分たちを売り込むか、同業他者と比べていかに自分たちが優れているかをアピールしていくことに必死だ。それに比べると福祉業界の人たちは自己アピールが足りない。」確かに、私たちの仕事は利用者を確認するために営業し、売り込むことはしてこなかったように思うのです。

もちろん、『福祉の仕事はそんな次元のものではない。』

と批判する意見もあるでしょう。しかし、これだけ人手不足が叫ばれる中、私たちの事業をどう持続させていくのか、法人個々の手腕が問われているのだと思います。

私たち CIFJapan の活動も多くの人に支持され、魅力ある団体としてどれだけアウトプットしていけるのか、法人存続のための知恵を振り絞り続けることが必要だと思います。



20年ぶりインドを訪れると、大きく変わった町の風景と変わらない笑顔がありました。(2018年 インドカルナカ州マンガロールにて)

CIF INTERNATIONAL の動き

フィンランド研修記

藤原望美(2023年 フィンランド)

2024.5.1に出発し5.29に帰国いたしました。CIF インターナショナルによるフィンランドプログラムに参加しました。参加者は5名。スペイン・ギリシア・シエラレオネ・トルコ・日本とアジアからは私一人。

第1週はヘルシンキ大学でレクチャーとエストニアのタリンへの日帰り旅行。

第2週は各人の希望領域のフィールドワークが地方都市にて行われ、私はヘルシンキから500キロ北にあるオウル市で児童・里親の支援施設や女性のシェルター見学。

第3週は再びヘルシンキに戻り、NGOやホームレス施設へのフィールドワーク。

プログラムは過密スケジュール。慣れない街で時間通りに移動することには困難が常に伴いました。

こんな生活を数年にわたり続けた留学経験者を心底尊敬しました。

プログラム開始前の3泊は湖のほとりのキャンプ場でメンバーとお互いを知るための時間をもちました。各自が持ち寄ったお国自慢の食べ物を互いに振る舞い、saunaと極寒の湖での水泳(5月初めは日本の真冬の温度です)。よき時間となりました。私が足をつけただけで震え上がり入ることのできない水温の湖で、CIF フィンランドのメンバーはゆったりと遊泳しており、「こんなに凍える水温なのに」と度肝を抜かれました。

私は英語が堪能ではないので、その分、別の領域で貢献しようと考えました。落雁が壊れぬよう手で運び、茶道のお茶席をホストファミリーが変わるごとに3回つとめ、温灸と短い鍼で体調不良のメンバーを治療し、フェアウェルパーティーではお能の仕舞を披露して、ジャパニーズらしさを発揮して参りました。

ホストファミリーとの生活も素晴らしいものでした。毎週ホストは変わったのですが、いずれもデザインの素晴らしい北欧家具に囲まれたサウナ付きのお宅でした。何より驚いたのは現役のお勤めの人の方が5時には帰宅して、6時には素敵なディナーを頂けること。毎日に余裕があります。アフター5は水曜日には家族で映画へ、木曜日はコンサートへ、金曜日には車で1時間半の距離の別荘へ…。毎日、夜9時に職場を出て、11時過ぎに夕食をとる私の生活はいったい何なのだろうとも振り返る思いでした。

さらに夏には5-6週間のサマーバケーションがあり、その間は「何をして過ごそう」と考えることもなく、自然に別荘(サマーコテージ)に移動し、晴耕雨読の生活。伝統的な薪のsaunaに入り、湖に飛び込んで、そのあとはBBQかガーデニングと穏やかに回復の時間を過ごします。

ただ、冬の寒さへの対策は全く異なります。冬の間は湖面が凍るため、湖への飛び込み台は放置するとバキバキに壊れます。冬の前には橋は撤去、春には再び橋をかける(HITATCHIの道具を使用していました)。同様に湖面にボートは放置できず、地上に戻します。恐らく同じことが一般的な港でも対策されていることでしょう。小型船舶も海面が凍るからと地上の安全な場所に移動させる必要があります。(ロシアの行動の根底に「不凍港がほしい」という気持ちがある…とはこういうことか、と実感しました)

慣れない土地でしたから、数回、迷子になりました。その都度、大変親切なフィンランド人に助けら

れ、涙が出るほど（寒かったので）うれしく、感激致しました。

なお、フィンランドの宗教はほとんどがルーテル派のキリスト教です。水曜日の礼拝に2回参列しました。聖餐式のウエハースは円形で磔刑のキリストが浮き彫りになるデザインであり、おもわず息を飲みました。礼拝堂の恵みの座での聖餐であったため、さすがに写真を撮ることは憚られました、大きな驚きでした。

政治は大統領が外交を、首相が内政を、それぞれ役割分担して責任を持つようです。日本でも有名になった34歳の若さで首相になったサンナ・マリネ氏については、国内ではあまり人気がなく、その理由は彼女の美貌と才能豊かであること、と聞かされた時には、人の心の複雑さを思わされました。

長い準備期間でしたが、「行ってしまえば何とかなる」という経験者の助言はその通りでした。数週間のうちに気が付けば独り言を英語で話している自分に驚いた瞬間もあります。2021年にIPEPをオンライン参加したとき、パンデミックの中でも受講できたことが喜びでした。そして2024年、対面でのIPEPに参加しそれを上回る喜びを得ました。

この2度のIPEPの違いも追記させてください。結論としては「オンラインの受講なしに対面参加の果実はなかった」と思います。2021年、画面を通して語りかけてくれたヘルシンキのソーシャルワークの関係者と対面で話せる機会により、3年前に抱いた疑問を直接お尋ねできたこと、これは大きなことでした。例を挙げるなら、男性の相談支援のNPO ミザアキを訪問し、離婚やDVを経験した男性のアサーショントレーニングを行うのだと説明を受けた時、「このようなことは児童期の教育の中で行われたほうが良いのではないか？」と質問し、先方も「間違いなくそう思う。だが、働きかけても実現しない現実がある」と応じてくれました。3年の間に英語力が伸びたのかといえさほど変化はありません。ただ、2021年の参加で、ひと通りの概要を聞いていたことが、その後の時間の中で疑問となり対面でのコミュニケーションにつながったということです。2021年が予習に過ぎなかったか、と言われるとそれだけではなく、その時の参加者同士、現在もSNSで繋がり、かつての参加者OBOGとして連絡を取り合っています。これがオーレンドルフ先生の目指した「国をこえた友情」ということなのでしょう。今回3年前に顔見知りになったCIFフィンランドのメンバーが同じくSNSの繋がりの中で私を覚えてくださり、「来年は対面で参加しませんか」と呼び掛けて下さった

ことで、諦めていた対面参加に挑戦する気持ちになりましたし、お誘いを頂いたからと（長期休暇は無理だと諦めていましたが）仕事に休暇申請するエンジンとなりました。

私のプログラム参加に際して、無事をお祈りくださいましたCIFジャパンの皆様に、心から感謝いたします。



フェアウェルパーティーで



伝統的な
サウナで
薪をくべる



ヘイノラの近くの十字架型の湖のほとりにある、ホストファミリーのサマーコテージにて。近隣のご家族も招いての略式ティーセレモニーのひとつ

各国の2025年IPEP 実施予定

国	実施日 (2025年)	申込 締め切り日	言語
AUSTRIA	May9- 25	December 15 2024	English
FRANCE	September 23- October18	January 15 2025	French
HELLAS	May24- June6	January30 2025	English
ISRAEL	May4-18	January 31 2025	English
ITALIY	September 20- October5	March 1 2025	English

CIF ジャパンを通してのお申込みとなります。

CIF ジャパンへの申し込みは、各国申込締め切り日の2ヶ月前となっております。すでに申し込みが終わった国は記載しておりません。USA その他詳しくは事務局までお問合せください。

今、思っていること・感じること

エピソードから見る人間のやさしさ

ナンディ・藤本隼子(1974年 コロンバス)

不条理な出来事の多い日々の暮らしの中で見つけた人間の思いやりや優しさに触れたことを書いてみたい。

しばらく前に、パリの地下鉄から地上に出るときに起こった出来事。

目の前にあるは、私の小さなキャリーケースと延々と続く地上への階段である。遙か上のほうに出口がポーツと見えていた。一段一段上り始め、3分の1ぐらい上った所で、突然キャリーケースがやたら軽くなったように感じた。あれっと思い振り向くと、そこには大きな一人の男性が私のそれに手をかけていた。一瞬恐ろしくなりどうしようかと思い、そっとその人の顔を見てみると、ニコニコして私を見ているの

で、「ああ、これは手伝ってくれるのだろう」と思うことができた。それから、なんとなく残り3分の2を上りきり、地上に到達できた。私は「メルシーボーク」と小さな声でお礼を言った。その人は、振り返りニコッと微笑み、スタスタと去って行った。こんなささやかな出来事でも、私には人間の優しさで胸がいっぱいになった。

ささやかな行為ではあるが、こんな風に人を幸せにできるんだと再認識した私。

それから、しばらく経つてのことである。よく利用するニューデリーのメトロのエスカレーターでの出来事である。それは、私がメトロのプラットフォームから地上に出るエスカレーターに乗ろうとした時のこと。そのベルトが手に触れず、もたもたしながら前に進んだ時だった。突然、誰かに片方の手首を掴まれ、息がとまるくらい驚いて後ろを振り返った。元気そうな男子生徒が私の手首を掴まえてベルトにおいてくれたことが分かった。彼は、「OK?」とニコニコと私に大きな声で聞いた。彼の潑刺とした声で心臓のドキドキが収まった。ベルトを掴んだ私の手は満足げに感じられた。転ぶことなくエスカレーターを乗り切って、駅の改札口を出ることが出来た。同じ出口だったさっきのその人に小さな声でもう一度「ダンニヤワード」とお礼を言ったら、その人はまた「OK?」と聞いてくれた。私が頷くとニコニコしながら去って行った。

何でもないささやかな行為が障害のある人には、とても大切なサポートになる。このように、ちょっとした手助けが障害のある人たちへの支えであり、幸せを感じさせてくれる行為である。

今年の7月の出来事をもう一つ加えたい。デリーで日本語を教えていた学生の一人が東京で働いており、いつの間にか家庭を持って日本の生活にたっぷり浸っている一組の夫婦との出来事である。

一時帰国した私の誕生日と重なり、一緒に誕生会をすることになった。彼らは、レストランの他の客も一緒に仲間に入れ、歌やスピーチなどすべてのお祝いを取り計らってくれた。この夫婦の私へのサプライズプレゼントであった。私にとって単なる驚きではなく、人間と人間の繋がりの一例として深く残るものであった。10年以上前に教えた学生が成長し、私の前で異文化の中で生き生きと人生を歩んでいる姿を見ることが出来て、私にとって誕生ケーキ以上の贈り物として心の中にどっしりと納まった。

またの一年を生きるためのエネルギーを与えられたことに感謝する。

ここに3つのエピソードを書いたけれど、やはり人間は一人では生きていけない動物であり、どんな時でも尊厳と愛情を忘れることなく社会の中で平和を願いつつ生き長らえることを願っている。

**CIP 参加からのソーシャルワーク
 半世紀を振り返って**

フォーク阿部まり子 (1975 年 モーガンタウン)

昔のソーシャルワーカー仲間の加納先生から投稿のお誘いを受け、今筆を取っています。CIP に参加したのは 1975 年、ほぼ 50 年前のこと。オリエンテーション 5 週間はウエストバージニア大学で、そして残りの 10 週間の実地研修は、ペンシルバニア州西部田舎のサマーセット郡（アメリカ 9 1 1 テロ事件の 4 つ目の飛行機が墜落した地）と隣接ベッドフォード郡合同地域精神保健センター経営のグループホーム。そこで住み込みスタッフとして働いた。当時はまだ目新しいコンセプトであった脱施設化、ノーマライゼーションの実践の場であった。一生町外れの大きな施設で暮らしてきた人々が初めて地域の中で人間らしく住む、という画期的でエキサイティングな時期でもあった。その 50 年後のアメリカでは、期待されていた地域精神保健センターは予算限定の中で精神面や知的障害を持つ人々をすべて支えていくことはできず、ホームレスや刑務所にもかなり流れていっているという悲しい現実がある。

私個人の経緯は、そのグループホーム勤務を延長してもらい結局は 10 か月ほど勤務した。その後自らの知識の浅さに痛感して、ミシガン大学ソーシャルワーク大学院にてより深く勉強するに至った。卒業後、日米の精神病院ソーシャルワーカーを 10 年程経験した後、過去 30 年余りはミシガン大学医療センター外来高齢者クリニックと家庭医療クリニック日本家族健康プログラムでの仕事にソーシャルワーカーとして携わってきた。主に高齢者対象の多職種連携医療ケア、カウンセリング、グループワーク、実習生指導など多岐に及んだ。日本に関する仕事としては、1990 年代は高齢者ケアに携わる多職種医療福祉従事者のミシガン研修プログラム（2000 年度日本介護保険設立に向け厚生労働省後援）、又 2000 年以降は当時は日本ではまだ目新しかったケアマネジャーや傾聴ボランティアの研修にも携わってきた。おかげ様で仕事を兼ねて毎年帰国でき、公私共々得るところは大きかった。

ここ 15 年程は高齢者対象の心理療法の一環として、マインドフルネスに基づいた認知療法のグループワークを色々開発するチャンスに恵まれた。鬱や不安症に悩む高齢者へのグループ、人生も終わり近い人々の許しのグループ、慢性疼痛マネジメントに関するグループである。各グループのささやかな臨床研究の成果も全国老年学会や学術誌に発表し、より広い領域での同業者と分かち合うことができた。(Mindfulness-based Cognitive Therapy

for Older Adults, *Journal of Gerontological Social Work*, 2014; Mindfulness-based Forgiveness Group for Older Adults, *Journal of Gerontological Social Work*, 2017 ; Mindfulness-based Group Therapy for Chronic Pain Management in Older Adults, *Clinical Gerontologist*, 2023)。日本国内では、共編著「高齢者のマインドフルネス認知療法」(誠信書房 2018) など。

コロナ禍では、外務省主催の在留邦人支援プロジェクト（デトロイト日本国領事館後援）の一環として、ストレス低減、ウェルネス養成マインドフルネス講座を毎週 3 か月間開催する機会（2022）にも恵まれ、数多くの在米日本人の方々にも出会う意義あるひとときであった。このような日米の様々な分野で、長年現場のソーシャルワーカーとして得た貴重な体験、又その成果を執筆や講演を通してより多くの方々とも共有できたことは誠に幸いであった。これも CIP への参加がその原点にあったことを思うと、実に感慨深いものがある。



自宅近隣。散歩中。



勤務する高齢者クリニックが入っている合同外来クリニック建物



ミシガン大学医療センター(Michigan Medicine)の外来クリニックの一つ。町中に散在しています。



ミシガン大学医療センター(Michigan Medicine)の外来クリニックの一つ。町中に散在しています。

平和を語り続けましょう

小山哲夫 (1977年・クリーブランド)

今日は2024年8月16日、この原稿を書いています。太平洋戦争敗戦の8月15日を迎える今夏も多くの平和に関する番組が放送され、新聞記事を目にし、歴史に関する書籍が紹介されています。

昭和23年生まれの私には直接的な戦争体験はありません。ただ幼いころ神戸の国鉄六甲道駅近くに住む叔父夫婦をよく訪ねていました。叔母が「省線」(国鉄は当時もまだよくそう呼ばれていました。)の車内で寄付を求める傷痕軍人に募金を幾度もする姿を覚えています。

私の両親・親族には戦前・戦争中の物語があります。ど

ういうわけか、お正月に家族がそろると、父は満州奉天での生活、職場であった製薬工場(メンソレータム)で働く若い中国人社員やロシア革命を逃れてきた白系ロシア人との交流を話してくれました。1945年の9月には、侵攻してきたロシア兵から同じ会社の若い婦人たちを守るため自宅の押し入れなどに彼女たちを隠したそうです。

敗戦直後父は地方政府に工場を引き渡し製薬製造の技術移転を行いました。昭和21年冬に、両親は4人の子供と近所の身寄りのない戦災孤児2名を連れ引き上げてきました。敗戦で国がなくなり避難民となった憔悴感、あの深い不安感は表現できないと母のコトバでした。冬の避難途中で休息したどこかの学校校舎の裏手校庭に凍てついた丸太棒のような多くの避難民遺体を見たこと。また、次兄が肺炎となり、持っていたベーコンを同じ避難民誰かのペニシリンと交換し次兄は命を取り留めたなどと母は話してくれました。4つ年上の三男は、やっと2歳でしたが、引き上げ船で当時練習船であった「日本丸」の甲板で三輪車に乗った記憶があると言っていました。

さきに書いた叔母の夫・父の弟の叔父は15年戦争・日中戦争に従軍(叔母が傷痕軍人に募金をしていた理由)。丘の上で指揮を執っていた折腹部に2発の機関銃弾を受けました。一発は貫通、2発目は腹部に残りその弾丸摘出のため、担架で手術の順番を待っていると隣にいた兵士が「ああこれが俺の人生か」の言葉を残し息絶え、俺は何の言葉を残して逝けばいいかと虫の息の中で思ったそうです。叔父が腹部の銃創傷を見せながら戦後に話してくれたこれ等のことを印象深く覚えています。

これらはいち家庭の歴史です。しかし世界史の見れば、私たちが意識しなくとも、日本の中国大陸侵略の構成の一部であったことに間違いはありません。その家族の物語の中で生まれてきた私にもその歴史を知り世界史的責任を自覚しなければなりません。

今日、沖縄の基地の存在を当然のように思う風潮。周辺島々が戦争に巻き込まれたら、具体的にどこの県が避難民受け入れるかが、実しやかに計画されるその無感覚さに恐れを覚えます。核兵器廃絶へ消極的な被爆国日本の政治家が同じ8月に進んで靖国神社を参拝訪問する姿に違和感はぬぐえせん。

CIF Japanの皆さんと平和について是非語り合いたいと思っています。



特定非営利活動法人 CIF ジャパン
2024 年度 総会報告

日 時：2024 年 6 月 29（土）13：00～14：00
会 場：法人事務所および ZOOM による。
出 席 者：江口敏一、梶村慎吾、加納光子、坂岡隆
司、浅野純江、上利久芳、奥野英子 以
上 7 名
全議案賛成者：青木雅子、小山哲夫、佐野富子、藤原
望美 以上 4 名
委任状提出者：上野美紀、岸川洋治、坂本正路、徳岡
久枝、祝部康二、牧田稔、三宅浩、山崎喜
久雄 以上 8 名 出席者、賛成者、委
任状提出者合計 19 名

会議成立と議長の選任：

坂岡隆司理事長は開会の挨拶をした後、
定款第 27 条により本会議は定足数を充
足しており有効に成立している旨報告し
た。次いで、定款第 35 条に基づき本総
会の議長に坂岡理事長が就任し議事に入
った。また、議事録署名人に江口敏一、
加納光子を指名することが承認された。

< 議 事 >

第 1 号議案 2023 年度事業報告の件

坂岡理事長は、事業報告書案に基づき関連する報
告を行った。
審議の結果、全員異議なくこれを承認した。

第 2 号議案 2023 年度決算報告の件

江口理事(財務担当)は、決算報告書案に基づき関連
の報告をした。

質疑の中で、本部への会費送金が計上されていな
いので後日確認すること、およびその結果に応じ
た処理を 2024 年度において行うことが確認され
た。

審議の結果、全員異議なくこれを承認した。

第 3 号議案 2023 年度監事監査報告の件

上利監事より、別紙に基づき 2023 年度の監事監
査報告がなされ、全員異議なくこれを承認した。

第 4 号議案 2024 年度事業計画案の件

坂岡理事長は、資料に基づき、2024 年度事業
計画を提案した。
審議の結果、全員異議なくこれを承認した。

第 5 号議案 2024 年度活動予算案の件

江口理事(財務担当)は、資料に基づき、2024 年
度収支活動予算を提案した。

審議の中で、第 2 号議案に関連し前年度の本部
送金が発生したらこれに対応することが確認さ
れた。

審議の結果、本議案は、全員異議なくこれを承認
した。

第 6 号議案 定款変更の件

坂岡理事長は、以下の通り定款変更をすること
を提案した。会の現状に鑑み、定款第 13 条第 1
項（1）中「7 人」を「3 人以上 7 人以下」に、
（2）中「2 人」を「1 人以上 2 人以下」とする。
また、同条第 2 項の「3 人」を「1 人以上 3 人
以下」とする。なお、現行条文と改正後条文を
対照すると、以下となる（下線改正箇所）。

< 現行 >

第 13 条 この法人に次の役員を置く。

(1) 理 事 7 人

(2) 監 事 2 人

2 理事のうち、1 人を理事長、3 人を副理事長
とする。

< 改正後 >

第 13 条 この法人に次の役員を置く。

(1) 理 事 3 人以上 7 人以下

(2) 監 事 1 人以上 2 人以下

2 理事のうち、1 人を理事長、1 人以上 3 人以下
を副理事長とする。

以上の提案について、全員意義なくこれを承認し
た。

第7号議案 任期満了に伴う役員の変更の件
坂岡理事長は、2024年6月30日をもって現在の理事及び監事の任期が満了するのに伴い、次期（任期は2024年7月1日より2026年6月30日の2年間）の理事及び監事として、先ほど承認された定款第13の規定により、理事については坂岡隆司、梶村慎吾、三宅浩、江口敏一、加納光子、藤原望美以上6名を、監事については上利久芳の1名を選任することを提案した。
これについて、全員意義なくこれを承認した。
なお、当該7名はいずれも就任を承諾した。

以上をもってすべての議事を終えたので、議長は閉会を宣言した。



《会費納入のお願い》 年会費 3,000 円

口座名義：特定非営利活動法人
CIFジャパン

他金融機関から

【店名】 四四八（読み ヨンヨンハチ）
【店番】 448
【預金種目】 普通預金
【口座番号】 5451973

郵便局から

【記号】 14400
【番号】 54519731
【名前】 トクヒ）シーアイエフジャパン

CIF インターナショナル HP より カンファレンス



CIF は、重要で話題のソーシャルワークの実践に関連するテーマで、隔年で会議を主催しています。また、世界中の個人やコミュニティを支援するための新しいアイデアを強調し、お互いを祝い合うイベントでもあります。

これらの会議では、通常、2日間の講義、ワークショップ、地元の NGO やソーシャルワーク機関への現地視察が行われます。残りの時間は、さまざまな CIF / CIP プログラムの卒業生と再会したり、文化的な場所を訪れたり、文化活動に参加したりすることで共有されます。

会議は通常 1 週間続きます。通常、開催国でのポストツアーのオファーがあります。

次回の会議は 2025 年にインドで開催される予定です。

《編集後記》

ニュースレター第 53 号をお送りします。
今回はアメリカやインドに在住されている方々からのご寄稿がありました。

ニュースレターに関しましてご意見がありましたら下記アドレスまでご連絡ください。

原稿のご寄稿も写真のご投稿も歓迎です。

cifjapannews2022k@gmail.com

<ニュースレター編集室>

CIF ジャパンの活動そのものについてのご意見、ご提言は下記 CIF-JAPAN 事務局のアドレスにお寄せください。

IPEP に関するお問い合わせも、CIF-JAPAN 事務局の下記アドレスに、メールまたは電話でお問合せください。

cifjapan08@gmail.com

Tel. 075-574-2800

<CIF-JAPAN 事務局>

加納光子